



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
6月号

通巻 658 号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年6月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 300円
★年間購読料 3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



昭和29年頃の大倭紫陽花邑の航空写真 ◀は鏡池、▶は仮拝殿

昭和60年頃の年始祭の後の法主を囲む座談から

静かな平和運動を目ざして

法主 矢追日聖

天皇が地に落ちる

今回の記事は、昭和60年頃の1月1日の大倭神宮での年始祭の後に神宮の社務所で法主を囲んで歓談していた時の記録です。ただし座談の全体を録音していたわけではないので、ごく一部だけの記録になります。が、大切な内容を含んでいるので、あえて記事にしました。録音していない部分も想像をたくましくしながら読んでみてください。

編集部

法主 天皇自身が生き神さんとして強制的にまつり上げられていたわけやね。それが戦争に負けることによって人間天皇になったわけや。

昔、「天皇が地に落ちる」という霊示を受けたことがあって、それがどんなことか不審に思ったことがあったけれど、それは戦争に負けることによって天皇が人間と同じ位置に降りるということで、そこに負けたことの大きな意味があったわけや。今は人間天皇を宣言しはったのやから、ただ資格としては日本の天皇やけれど、国民と同じ人間対人間という形になってきて、外国の人が来ても直接話しをしてるし、国民も生き神さん扱いをしてへんし、それだけ古代社会に近づいてきているわけやな。

そんなことになってきたから、現在の天皇の裏側にいる(※霊界の)登美の連中にとっても、戦争に負けたことが慰霊

になっているんやな。そんなんで物事が引っくり返っても、裏から仕事をしてくれる存在があつて、善悪不二で善も悪もないから結果として良うなっていくんやな。

戦争に負けて、えらいこっちゃと思つてここ

(※大倭神宮)でお詣りしていたら、ここには過去からの色んなカミさんがいるからね。地球の相が出て来て、それを見てみると、地球のどこにも日の丸がひらめいている。勝った時なら分かるけど、負けた時に日の丸が出るのはどういうことかなと思つたけれど、これが世界平和の象徴やったんやね。日本が負けることによって、結果的には平和になっていくことやね。

私が神宮でお詣りしていてもそういう相が出てくるんやから、私も何か仕事をしなければならなと感じたわけや。

平和への第一条件

その第一条件は好き嫌いをしないということや。あんたら、それだけは守つて欲しい。人に対して好き嫌いをしないということや。「あのガキめ」とか「いややな」とか。(笑) そうした心が戦争に結びつく。アメリカ人が嫌いとか、ソ連人が嫌いとか、そんな心を持つて、それが積み重なつていくと戦争に行き着いてしまう。平素からそういう心をなくしていくと自然と平和になる。

武器などを持つのは構わへんとカミさんは言わはる。毛虫でも毛で身を守っているし、蜂でも針を備えていて、動物は自分を守る武器を備えていると言わはる。だから国として武器を持つことは構へんのやけど、使うことはするなと言うのや。そういうことがあつては困るわけや。

だから、何も戦争反対とか核兵器反対とか騒

がなくても、心の中に平和の火をともした方が平和運動になるんやけどね。一番分かりやすいのは好き嫌いを作らんことや。「あのガキめ」なんて思わんことや。(笑) 一人一人がそうなつていけば、世の中は必ず平和になっていく。

同じ包丁を持つとしても、炊事場で出刃包丁を持つて奥さんが食事を作つていても、それは武器にならんもの。同じ出刃でも、心の悪いやつが強盗に入つてきたら、それは凶器に変化するんやから。使い方の問題やね。

核物質を発見したことも、人間の知識としてはいいことやと思う。それを戦争や人殺しに使わずに人間の幸せのために使えばいいわけで、それは心の問題やもの。

そんな意味での平和運動は表に目立たんような静かな運動やね。それが光明皇后の言うような「地下水の如く清く流れよ」という地下水運動やね。そして形は、一つ一つの小さな花が丸く寄り集まつている紫陽花の花のように寄り集まつて生活せよということや、いわば共同体のような生活のことやね。

それは大倭の理想やけれど、私が生きているうちにこれだけ喋つておいたら、死んだ後でも誰かがこのことを言うってくれる人がおると思う。随分



法主宅で使っていた食卓についた傷の跡

書いたものは残しているから、読んでもらつたら分かるしね。

食卓に残る傷

日元 法主様は頭からしょんべんをかけられても、温い雨が降つてきたなという気持ちで行けたらいいと前に言われていたけれど、言葉では分かるけれど難しいですな。(笑) 実際そうだった時にはどうでしょうか。いやホンマに。

法主 Kがお膳を引っくり返したこともあるしな。(笑) どんなこともあるわいな。あつたかて別に腹は立たないし憎む気持ちもないしな。そんな土足のままでご飯のお膳の上に足を乗せて引っくり返すような人間に生まれ合わせた相手がかわいそうや。普通の者はそんなことは出来ひん。出来んことをやるように生まれてしまった。そんな気持ちを考えてみ。哀れやしかわいそうや。腹なんか立ててはいられん。

日元 その奥までは我々はなかなか理解できへん、ホンマに。(笑)

法主 土足でボーンと蹴つ飛ばして、はずれたところにまだ穴が開いとるわ。真つ黒けになつていくけど。これもKの名残りやと見ておるんやけど。その人はまだ生きておるけど、幸せにいくようにいつでも気持ちでは思つておる。いつもそれが目の前に見えるんやもの。(笑) それが大和心やと思うんや。皆そんな気持ちになつてくれれば一番いいんやけどな。

法主・言の葉



生きていることは

死後の舞台稽古である

新シリーズ「私と大倭」(第2回)

柴地則之と法主さんの思い出

木村 聖哉

1969年(昭和44年)3月、関西から上京し、東京暮らしも半世紀を超えた。高層ビルが立ち並ぶ大都会の片隅で、私はひっそり生きている。

先日85歳の誕生日を迎えた。畏友だった柴地則之より36年も長生きしている。彼の面影は若いままである。

柴地とは60年安保闘争の高揚期に同志社大学の新聞学研究会で出会い、40代で早世するまで親しく付き合った。互いに「柴地」「木村」と呼び合う仲だったので、今さら「柴地さん」とは呼ばない。

彼は1941年(昭和16年)10月、三重県伊賀町で生まれた。柘植^{つげ}駅前の旅館の長男で、父親は自民党三重県連のエライさんだった。川崎秀二(衆院議員)の後援者だったと聞く。亀山高校時代は新聞部の部長として大活躍した。

そんな育ちのせいか、世慣れていて物おじしなかった。何事にも積極的でオルガナイザーだった。私は熊本の田舎育ちで、早く父親を亡くしたので、世間知らずで引ッ込み思案だった。

ボランティアのワークキャンプ運動に飛び込んだのも柴地が先で、誘われて私も参加した。1年生の時は火事で焼け出された吹田大橋下のスラム住民の支援に。2年生の時は兵庫県と京都府の開拓農村で肉体力労働を。他にも大阪府の福祉施設や生野区の東大阪朝鮮第5初級学校の運動場づくり等に参加した。

そして4年生の時に鶴見俊輔教授から知人のハ



▲1963年9月、同志社大学山中湖ハウスでの新聞学研究会の合宿で。左から大宮正勲、柴地則之、木村聖哉

ンセン病元患者が東京で宿泊を拒否された話をゼミの授業で聞くと、FIWC(フレンズ国際ワークキャンプ)委員長だった柴地は即行動に――。

大倭の矢追日聖(法主)さんを訪ね、ハンセン病回復者の宿泊施設をつくりたいと土地の提供をお願いする。これが柴地と大倭が結びつく機縁となった。

土地は法主さんの一存で無償提供され、紆余曲折を経て1967年(昭和42年)交流の家は完成。その経緯については鶴見さんと私の共著『むすびの家物語』(岩波書店刊)に詳しい。

1963年の夏、山岸会の特別講習研鑽会が三重県春日で開催された。それに参加したのも柴地に誘われたからだ。山岸会の創始者・山岸巳代蔵が実家の旅館に長逗留したこともあり、彼は早くから山岸会に関心を抱いていた。

この「特講」には全国各地から120人ほど集



▶山岸会の「特講」で。(柴地則之撮影)左から今村忠生、4人目鶴見俊輔、木村聖哉

「ユートピアの原思想——山岸巳代蔵を中心として」を書き上げた。

大学を卒業したら大学院へ進むことも考えていたように知的好奇心が強く学究肌の面もあった。後に雑誌『思想の科学』に「山岸巳代蔵の生涯」「幻の世界への回帰」「谷川雁論」「妣が国共同体を求めて」等々を発表。古代日本の共同体に理想社会の原型を見た。

大学卒業後、私は大阪労音(音楽鑑賞団体)事務局で働いたが、柴地はどこへも就職せず大倭紫陽花^{むすび}の一派に。大倭教の教祖・矢追日聖という人物に魅了されたのだろう。

そして「交流の家」建設は後輩たちに任せ、その動きを見守りつつ法主さんの片腕となり、「大倭新聞」を復刊し、大倭印刷や大倭殖産を立ち上げた。彼は起業家としてもコーディネーターとしても極めて有能だった。

構想力があり、いつも先を見ていた。人当たり

まり、鶴見俊輔さん、今村忠生さんも参加。二人と一緒に撮った写真が私の手元に残っている。

特講は面白かった。私は「無所有」「零位に立つ」「腹が立たない」等を学んだ。

柴地は卒業論文に山岸会を取り上げ、

もよかったので事業は順調に伸びた。

考え方が柔軟で、調整能力に優れていたで、宅建業界でも信用され、前途を嘱望されていた。

大倭病院の開設にも直接携わっている。私が何かの用事で大倭へ立ち寄った際、柴地が完成したばかりの誰もいない病院内を案内してくれたことがある。

その時の彼の得意そうな顔が忘れられない。総工費が何億かったなどと苦労話を聞きながら、さぞ大変だったろうと思った。後で知ったことだが、病院の建設だけでなく医師の人事まで任されていたという。

柴地は「善意の独裁」と称された法主さんの信頼を得て、大倭安宿苑、長曽根寮、菅原園など既存の福祉施設の他に、ゼロから新事業を興し、紫陽花邑に経済的な基盤を築いたのである。実務能力のない私はただ驚くばかりだった。

当時日本はバブル経済の真つ最中で、みんなモータレツに働き、それいけどんどの時代だった。柴地は大倭殖産社長の傍ら、大倭教の各種行事にも参画して休む暇もなく働き続けた。その無理とストレスが重なり、1989年(平成元年)9月24日急逝した。まだ48歳だった。

奈良県宅建業界の不動産フェアが終わった夜、タクシーで帰宅途中に体調が悪化、急きよ大倭病院に向かい、そこで亡くなったのである。働き過ぎ、がんばり過ぎだった。

責任感が強く有能な人間に仕事は集中する。柴地は仕事に殺されたのだと、私は悔しかった。愛する妻子を残し、志半ばで逝った柴地はどんなに無念だったことか。片腕を失った法主さんの嘆きと落胆ぶりはいかばかりだったか。

＊

ワークキャンプは若い男女の集まりだったか



木村聖哉・鶴見俊輔共著
『むすびの家物語』(1997年刊)

ら、いくつもの恋が生まれた。柴地も宮下曉子さん(大阪大学薬学部)とワークキャンプで知り合い、27歳の時に結婚。二人はまことに仲睦まじい夫婦だった。やがて薬剤師の免許を持つ曉子さんは大倭の近くで薬局を開店する。彼女の父親は医師だった。そうした家系を受け継いだのか、柴地の望みもあつたのか、長男は医師の道を選んだ。私にちよつと忘れられない思い出がある。いつの頃だったか、柴地が法主さんのお供で東京へ来た時に宿泊先の目黒雅叙園に招かれた。由緒ある高級旅館で、法主さんの定宿だったようである。ここの和室で夕食をこ馳走になった。どんなご馳走を食べたか、どんな話をしたか記憶にないが、途中で和式のトイレに入って驚いた。その広いこと! 2畳くらいの広さがあつて仰天した。トイレが広過ぎて落ち着かなかつたことを覚えていた。

柴地は法主さんの教導に随行して日本各地へ旅している。その手配や案内は面倒見のいい彼が取り仕切ったにちがいない。こうした旅では多忙な日常から解放され、少しは息抜きができたのではないか。そう思うといささか慰められる。

私は法主さんには数えるほどしかお目にかかつていない。いつも笑顔で飄々としておられた。偉

ぶつたところがなく、柔らかな関西弁が心地よかつた。懐の広い人で頼ってくる者は誰でも受け入れた。現界と霊界を自由自在に往き来し、何物にもとらわれない異能の人だった。

法主さんの話を聞いている間に激しく霊動を起こす人もいたが、私には一度も霊動が起きなかつた。自分には霊界のことは分からない。見える人には見えるのだろう——と思った。

法主さんが亡くなられて30年近くなるそうだが、法主さんの声は今も身近に聞くことができる。毎月の『おおやまと』刊行のお陰である。杉本順一さんから側近が法主さんの話をよくぞ録音し、大事に保存していたものだ。

『おおやまと』は昨年亡くなった岸野春子さんが中心になって編集されていたと聞く。これにより大倭一門は法主さんの教えと年中行事をよく守り、共に助け合い、事業に励み、家庭と生活を維持してこれたのだろう。

成り行きで生きてきた私には、移り変わりの激しいこの世の中で柴地則之という逸材と矢追日聖という大黒柱を失いながら、紫陽花邑という共同体がちゃんと存続していることが驚きである。強烈な指導者亡き後も各部門の責任者が必死に頑張られたお陰だと思ふ。また外から入り支える人たちもいて、現在があるのだろう。

大倭病院は数年前に閉じたという。邑の一角に在る交流の家も老朽化し、いずれ終焉を迎える日が来る。始めがあれば必ず終りがある。「諸行無常」が自然の理であれば受け入れるしかあるまい。私にとって大倭紫陽花邑は「心のふるさと」である。

85歳の老人になって思うことは、これまで自分が出会った人は、みんな愛しく、みんな懐かしい。これまでご縁のあつた人に感謝、感謝である。

第352回大倭会文化行事報告

素敵な雨の出町柳界限散策

中村 千久佐

2025年5月17日(土曜日)

出町柳駅10時30分集合で時間通り出発。一行は林修三さんの案内を受けつつ、かの有名な京都大学「進々堂京大北門前」にてフランチセツトを頂く。店内に静かに流れているBGMと木製の長テンプル・長椅子が素敵な雰囲気を出している喫茶店であった。

次に「百萬遍知恩寺」では雨と松の木の風情が印象的で、雨など気にならないくらい和気あいあいと楽しみながら歩き、「吉田神社」へ向かう。



百萬遍知恩寺

「ここ吉田神社」は、かなり広い境内で全国の神々を祀る大元宮(重要文化財)や料理の神様として藤原山蔭卿が祀られている社です。日本で初めてあらゆる食物を調理調味した人物と言われ、古来より包丁の神、料理飲食の祖神として業界の方々の信仰を集めている。お菓子の神社「菓祖神社」には田道間守命と林浄因命二人の神様が菓子の祖神として祀られており、京都を中心に全国の菓子問屋や菓子職人、パティシエなどお菓子業界の方から信仰されている。料理とお菓子の神社って珍しいなあと思っているが、ち

よつと軽い気持ちで手を合わせました。節分祭では例年約50万人の参拝者が訪れ、境内は多くの露店と厄除け祈願やくちなし色の御神札を求める人波で埋め尽くされます。



小雪ちゃん

次に「宗忠神社」は、正参道入口に逆立ちした狛犬が特徴的です。また、石段を登り切った所に、看板犬である白柴の「小雪ちゃん」が可愛い顔でお出迎えしてくれる。しばし小雪ちゃんに相手をしてもらい、楽しませてくれた。小雪ちゃん有難うね。

後ろ髪引かれつつ、小雪ちゃんと別れ、「真正極楽寺真如堂」へ。ここは江戸時代に再建された本堂(重要文化財)や三重の塔が雨の境内によくマッチした風情でした。

道すがら気になったのが、「陽成天皇神楽岡東陵」で、陽成天皇? 勉強不足なのですが、聞いたこともない天皇だったので調べると、九歳で即位、十七歳で退位、在位期間はたった八年の天皇で、ここで私は少し陽成天皇について知りたいと思いました。若くして上皇となった陽成天皇ですが、馬に乗って下人の家へ突入したり、屋敷を荒らしたりと傍若無人だった陽成天皇は、老境に差し掛かる頃に五人の妃と六人の親王・内親王に恵まれ豊かな晩年を過ごし、当時としては異例の82歳で大往生を遂げました。

歩き過ぎて疲れが出てきた頃、林さん念願のオムライスのある「喫茶とパンドロ」で中休み。林さんは早速注文。他の人はハムサンドやトーストを飲み物と一緒に注文する。店内はたくさんの人で埋め尽くされていて、ウェイトレスのお姉さんが一人バタバタと動いていたが、注文したものが一向に来ない。店内に入って早40分? 1時間程過ぎてやっとオムライス到着。しばらくしてミルク、その後ハムサンド、トーストが到着したが、コーヒーが来ない。見ていると店奥でコーヒー豆を挽く音がした。気の長い人ばかりで誰も遅いと文句を言わないし、その間は楽しい話で盛り上がっていたよ、確か……。

最後は岸田さんが朝からお使いのメモに書いてあった「名代豆餅 出町ふたば」の店舗に移動して、長蛇の列を目の当たりにしたが、並んでやっとな「豆餅」を手に入れ、出町柳駅に戻ってきた。時々歩数を見ながらみんな「今で1万ちょいか」と言いながら、行先も止まる駅も確認せず乗車したら、降りたい駅に止まらず、結局大阪周りで帰ってくることになった。今回一番の珍道中報告です。誰かの足が絡みそうになっているのを見たが、頑張っ歩いて証しだと思いました。参加された方、本当にお疲れ様、楽しかったですね。



真正極楽寺真如堂の三重塔

新皇教宮訪問記

すがすがしい和の光

2人の武将

今年1月末から長期出張で栃木県佐野市にあるホテルに滞在している。そこで読んだ、『おおやまと』2月号(通巻654号)は新皇教宮を特集していた。新皇教宮は大倭紫陽花邑と深い交流のある場所のひとつであり、平安時代に活躍した二人の神格化された武将、すなわち、生前の俗名を隠して将玄坊大善神、ならびに正覺坊大善神こと藤原秀郷公が祀られている。

生前、2人の武将は関東圏の豪族として大いなる勢力を誇っていたが、武家社会の立場や思惑からみ、秀郷公へ勅命が発せられたのを機に戦となる。この戦は秀郷公が勝利することで幕を閉じるのだが、新皇教宮には、興味深いことに敵同士であった、この2人が祀られているというのである。

敵同士が祀られることになった、そのいきさつは同2月号3頁の杉本順一さんの「新皇教宮を訪ねて」に詳しいが、亡くなれば皆同じ仏さま、というようなまとめ方で2人が祀られたのではない。亡くなっている、仲良くすることの大切さを武将に諭し、隣り合わせにして祀ることで生前から引きずる苦悩から2人を解放させているように見受けられるのである。新皇教宮は2人の武将を祀るためだけではなく、争うことを止め、相手を受け入れて仲良く暮らすことを私たちに教えているのではないか。だとすると、まさに大倭と交流のある場所としてふさわしい。

京都市 加納 暉 韜

秀郷コーヒーを贈る

この新皇教宮特集号を出張先のホテルで読んだのだが、たまたまホテルの1階に秀郷珈琲という喫茶店があった。店名は、北東方向に秀郷公の居城址、北西には墳墓があり、このあたり一帯が秀郷公ゆかりの土地であったことから名付けられたという。「加納、ただいま秀郷公のお膝元におりますよ」と、紫陽花邑に知らせたいのもあって喫茶店の商品である秀郷コーヒーを紫陽花邑に贈った。

それからしばらくして、新皇教宮を守っておられる中村家の御一行が紫陽花邑を訪ねられる。一行の中にはイギリス住まいの女性、後に新皇教宮で私がお世話になった櫻井節子さんの娘さんがおられた。現地イギリスで、いろいろ思うところがあって日本に帰国することあれば、とにかく紫陽花邑を訪ねてお参りしたかったとのこと、娘さんに乗じての訪問であった。

御一行が紫陽花邑を訪ねられた際に、私がお送りした秀郷コーヒーでもてなしたという連絡を林修三さんから頂いた。御一行は、遠く関東から紫陽花邑を訪ねて、縁深い「秀郷」と命名されたコーヒーが出されたことに奇遇を感じられたことである。やたら「おもてなし」を標榜する京都に在住する加納ゆえに、おもてなしの役を担わせて頂いたのだろうか。そのように思いを巡らすうち、新皇教宮に何かしらの縁を感じて、参詣させて頂きたくなり、林さんのご協力もあって去る4月20



藤原秀郷公墳墓

日に参詣がかなう。

新皇教宮に参詣する

出迎えてくださったのは櫻井節子夫妻。節子さんは中村家の末娘である。中村家は先祖の代から長年、新皇教宮となった土地を守ってきたのだが、報われるどころか良くないことが続いたという。それは、中村家のみならず、このあたりの住民にも、その傾向がみられたのだとか。中村家にどのようなことが起きたかは省くが、もともと、中村家は代々のお百姓さんであったにもかかわらず、その昔、かつて家の片づけをした際には、たくさん刀が出てきて驚かされたという逸話がある。隣家の子供は、落ち武者であろうか、夜な夜な武将が現れるので、この地を畏怖したという。ここには「もののふ」の残留する念のようなものが怪異現象まで招いていたようなのである。怖い。

ただ、そのようなことも、法主さんとの出会いを機に、そこが大倭と交流するに及んで平穏となる。そして、平成26年に秀郷公が加えて祀られるようになると、新皇教宮を守る中村家の方々も一層、落ち着いた日々が送れるようになった。

ここを実際に訪れれば、誰もが、住人を苦しめたことのあるところだったのだろうか、と疑いた

くなるに違いない。丁寧に掃き清められ、枝垂れ桜と八重桜が満開で、ウグイスが語りかけるようにさえずる。桃源郷、さもありなんといった感じだからだ。

中村家の先祖が建てたという社に上がらせていただく。切れた裸線が巻き付いている碇子が天井近くに残されていて相当の築年数であることが分かるが、古いにもかかわらず、すがすがしい。正面に将玄坊大善神、その左脇に杉本さんが節子さんに託した正覺坊大善神の御霊しろ(法主さんが正覺坊大善神と書かれた札)が祀られている。そして右端には法主さんが微笑むカラー写真が額に入れて飾られている。

節子さんが大倭の祝詞を、ゆっくり、ていねいに奏上される。気持ちが和んだ。額に入った法主さんのくっつく顔を見ていると何かしたくなつて、妙法蓮華教普門品第二十五の偈を法主さんに向けて捧げた。唱え終わって、節子さんの方々向くと節子さんが涙ぐんでおられる。

正覺坊大善神の御霊しろから珠が放出され、それが節子さんの胸の中に飛び込んできたのだという。すると、正覺坊大善神の歡喜で節子さんの体が包まれた。その歡喜すさまじく、節子さんは、平静を装おうと、こらえようとされたのだが、抑えることがかなわず涙になったという。さらに、正覺坊大善神は、この私が、なんと秀郷公ゆかりの者であることを教えてきたというのである。母方祖父は九州の人だが出自は奥州藤原と聞いているので、何か関係しているのかもしれない。

敵味方なく

ただ、栃木では「県民みんな藤原家の子孫」といったりするらしい。佐野市の看板には「全国、佐藤さんの故郷」とあった。佐藤姓は、佐野の藤



御霊しろ

原家を由来としており、ここが佐藤家発祥の地というのである。今では、さまざまな家系と混ざり、全国で一番多い姓である。その昔に戦った、敵、味方、双方の血統を、長い時間をかけて混在させながら、それを重ね、子孫は拡がっていくのである。

新皇教宮を訪ねる直前、林さんから、和の光を持つて将玄坊大善神と正覺坊大善神の2神をお詣りくださいとの言葉をいただいた。何かと人は自分都合により、敵だの味方だのと分け隔てしがちだが、すでに自分が敵味方を混在させてきた、白黒つかない存在であることを認識すれば、そういった分け隔てが利他的であることに気付かされる。そこでもって、何事も和の光で臨めば人はもつと暮らしやすくなるに違いない。新皇教宮では、かつて打ち、打たれた関係の2神に法主さんも加わって和やかな神界を築いていることだろう。たまには口喧嘩くらいあって、法主さんがまあまあ、とか言っていて仲裁しているのだろうか。

新皇教宮は、紫陽花邑と同様にすがすがしく、居心地の良いところである。人が訪れるようになれば、紫陽花邑のようにユニークで素敵な方々が集まることだろう。

柄にもなく、そのような想いを櫻井夫婦に申し上げて新皇教宮をあとにした。
櫻井さん、とり弁当おいしかったです。

イギリスからの手紙

拝啓 杉本さん、編集部皆さん、お変わりなくお元気でお過ごしですか。

3月末、大倭に伺った際は暖かく迎えてくださりありがとうございました。『とおやまと』に度々出て来るお名前とお顔が、ようやく一致しました。

杉本さんと高橋さんには2011年の8月に一度お会いしたことがありましたが、林さんと岸田さんとは今回が初めてでした。

思えば緊張と喜びの混じり合う不思議な時間であつた気がします。その中で頂いたコーヒーが、正に緊張感を溶かしてくれたように思います。また度々かけていた電話番号が、このの教務所だったことを改めて認識すると、長い間大変お世話になったと感慨深くなりました。お忙しい中、常に真摯に対応して下さい、大変ありがとうございます。その中で、多くの貴重な学びを得たことは幸福であると感じています。いつか「絶対に責めてはいけない」と教えて頂いたことがありました。今でもその言葉が心の中で響いています。

私は心で感じるということが鈍いので、感覚的には理解できませんが、心の深さや心情といったことに対し、心の底から感じ取ることは今でも難しいのが事実です。それでも、法主様の言う「風呂敷を広げるように」一心を広げることを課題として自己の向上に努めたいと考えています。

季節の変わり目で不安定な時期でもあります。また、朝晩の気温の差も激しいと聞いておりますので、どうか体調を崩されませんようご自愛ください。これからもよろしくお願ひ致します。 敬具

櫻井利香

あじさい日誌

5月8日 午後4時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

5月9日 午後1時すぎ松本直之、大城由香理さんに案内されて高槻市の兼平真由美さんが来呂されました。

5月11日 午後2時から大倭会主催祝会が開かれました。前日から交流の家に泊られていた熊本県水俣市の高倉敦子さんも参加されました。この日は法主さんの言われていた「人間性の向上」がテーマでした。

5月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

5月17日 大倭会日帰り文化行事で京都市の吉田山周辺を散策しました。(5頁参照)

5月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。岡山県真庭市の庄宏樹さんが参拝。大倭会館で一泊されました。

5月24日 午前11時から交流の家でFIWCの定例委員会が行われました。

5月26日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

6月1日 午前8時から大倭墓地の掃除が行われました。

6月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日は金澤秀朗さんに連れられて、初めて岡山県美作市の澤裕美さん、愛知県江南市の鈴

東光大祭 祖霊祭 祭典のご案内

令和7年9月6日(土曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は8月5日まで。日数に限りがありますので、お忘れのないようお願い致します。

※9月6日10時30分より大倭神宮の月次祭が行われます。

木喜美さん、西宮市の福井晶子さんが参拝されました。



大倭安宿苑では

5月10日 法人成立69周年記念日を迎えました。今年も感染症対策で皆が一堂に会する式典は残念ながら中止しましたが、成謙坊大善神へのご挨拶は矢追家麻呂教長さんを祭主に理事長はじめ管理職のみで午前10時より行いました。また永年勤続職員に各施設長等から感謝状や記念品を贈呈しました。全員で15名(30年1名、20年8名、10年6名)でした。

(菅原園)

5月7日 午後からご利用者をモデルにして、職員が似顔絵を描きました。絵を見て「似てないやん」と言いながらも喜ばれ、楽しい時間を過ごしました。

6月1日 午後からご利用者数名がドライブサークルで、薬師寺周辺を一周しました。

(須加宮寮)

5月10日 法人成立69周年記念日のお話を施設長が館内放送されました。聞いたご利用者が、お祝い事であれば正装しない、とスーツを着ていました。昼食時ごちそうを頂き、午後か

らはカラオケを楽しみました。

5月13日 書道クラブを行いました。先生のお手本を見ながら、真剣に書いておられました。

(長曾根寮)

5月5日(デイ)端午の節句にご利用者、職員が兜を被り、2チームに分かれて兜を取り合うゲームで楽しみました。

5月10日(特養)法人創立記念日で各フロアにて行事食の松花堂弁当をご利用者も職員も美味しく頂きました。

5月20日(特養)ベランダに出て外気浴を行い、外の空気を吸ってもらうことにより季節を感じて頂きました。

(茂毛路園)

5月10日 法人成立69周年記念で、昼食は行事食で創作料理を皆さん美味しく頂きました。

5月29日 今月よりお昼ご飯に全国47都道府県のご当地グルメメニューの提供を始めました。

第1弾は石川県の郷土料理(押し寿司・治部煮・めった汁・抹茶プリン)の献立でした。ご入居者の中に地元が北陸地方の方がおられ大変満足していました。

ご帰幽のお知らせ

▼杉立かよ子さん 去る3月21日に帰幽されました。「あじさいの箱」で活躍していました。

▼榎本恵美子さん 去る4月22日に帰幽されました。大倭殖産(株)や大倭安宿苑で長年仕事を

をして頂きました。

▼石田勝利さん 去る4月26日に帰幽されました。本紙『おおやまと』の表紙に何度も写真を提供して頂きました。

編集後記

▼今月号冒頭の「静かな平和運動を目ざして」の座談の日として「昭和60年頃」としてありますが、60年か61年かどうかどうも特定できなくてこうした表記になってしまいました。後日確定できたらお知らせします。(岸)

あんない

*月次祭(大倭神宮)
7月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
7月13日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
7月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
7月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭大本宮境内清掃

して清霊宮境内・祖霊宮境内・神事・夏祭・関係者・行事・東光大祭・日程・午前8時より行われます。午前8時より行われます。午前8時より行われます。